

日本産菌蕈類の研究 第1報

數種の新種並稀種菌蕈類

囑託 岩出亥之助

Inosuke IWADE : Studies on Japanese Fungi. (I)

Several New and Rare Species of Fungi.

目 次

緒 言	51
1) <i>Auricularia hispida</i> Iwade	51
2) <i>Poria sparassoides</i> Iwade	52
3) <i>Hydnum fimbrillatum</i> Iwade	53
4) <i>Cantharellus purpuraceus</i> Iwade	54
5) <i>Cantharellus violaceus</i> Iwade	55
6) <i>Tricholoma confragipes</i> Iwade	56
7) <i>Armillaria edodes</i> Berk. f. <i>sterilis</i> Iwade	56
8) <i>Sarcoxydon aureum</i> Iwade	59
9) <i>Peridioxylon petersii</i> (Berk. et Curt.) Shear	60
10) <i>Boletinus cavipes</i> (Opat.) Kalchbr.	61
圖版說明	61

日本産菌茸類の研究 第1報

數種の新種並稀種菌茸類

緒 言

筆者は昭和8年以來主として樺太、北海道、朝鮮、臺灣等各地所在の東京帝國大學附屬演習林に出張し菌茸類の蒐集を行つてきた。其の目的は菌茸類の分布及、化學的成分の研究資料採取にあつたが手にした種類極めて多く、内外文献に見出し得ないもの亦多數に上り研究上の不便が少くなかつた。そこで之等の標本に就ては新鮮な間に描寫し、爾來種屬の鑑別に當つてきた。此處に報告するものは其等の中で研究の進行上、必要に迫られ或は特に興味の深いもの 10 種を取り纏めたもので、同學諸賢の御參考ともなれば幸甚である。

本研究に當り種々の御便宜と御鞭撻を與へられた歴代の東京帝國大學附屬演習林長、菌部一郎博士、三浦伊八郎博士、吉田正男博士並に研究上特に文献の閲覽と御指導を賜つた千葉高等園藝學校川村清一博士に對し深甚の謝意を表する。又ラテン語の附記等につき特に御助言を寄せられた東京科學博物館今關六也學士の御厚意に感謝する。（於、東京帝國大學農學部森林化學教室）

1) *Auricularia hispida* Iwade, sp. nov.

子實體は無柄、半圓形、初め倒碗狀なるも成熟するに従ひ漸次開展して扁平乃至反轉するに至る。徑 5~12cm. 基脚部に於ては厚さ約 1cm. あり、周邊に向つて漸次薄く、縁邊薄くして全邊、傘の表面は黃褐色の束毛を被むる。この束毛は中空にして疣點を有する毛の集合體にして緊密に結合される。傘の肉は淡飴色で膠質、乾燥すれば軟骨質となる。下面の子實體層は濃紫褐色、多數の網目狀の凹窩を有する。擔子基は狹紡錘形、大さ 77~94×6~9 μ あり、4 胞よりなり、各胞の上側より小梗を出す。胞子は無色、腎臟形、平滑、大さ 12.5~17.0×6~8 μ 。

Pileo sessili, dimidiato, convexo dein applanato vel reflexo, 5~12 cm. lato, apud basem ca 1 cm. crasso, margine acuta, integra, primo involuta, maturo reflexa, superficie fusco-ochracea, dense fasciculato-hispida, contextu gelatinoso, ochraceomeleo, in sicco cartilaginoso; hymenio concavo, tenuiter alveolato, fusco-purpureo;

basidiis cylindraceis, $77\sim94\times6\sim9\mu$ crassis, 4 septatis; sporis hyalinis, reniformibus, $12.5\sim17.0\times6\sim8\mu$.

和名, オホアラゲキクラゲ (大荒毛木耳) 新稱,

産地, 北海道空知郡東山村, 東京帝國大學北海道演習林の林内, 熊の巢澤, アカダモ (*Ulmus campestris* Sm. var. *laevis* Planch.) の倒木上に發生, “Typus” —1933—VIII—30, 岩出採集 (東京帝國大學農學部及東京科學博物館に保管); 同演の林内, 川松澤, アカダモ薪材上に發生, 1934—IX—2, 岩出採集,

附記

本菌は傘の表面に粗毛を有することにより一見アラゲキクラゲ [*Hirneola* (*Auricularia*) *polytricha* Mont.] と類似するも其の粗毛の構造に於て著しく異なるものである。即ち後者の粗毛は單一にして傘の表面下約 40μ の所より垂直に發生するに反し, 本菌は第2圖(1)に圖示する如く傘の表面に網狀に發生せる多數の單毛が相集合してなる束毛にしてかゝる特殊の粗毛は, 他の *Auricularia*, 又は *Hirneola* 屬に於て未だ發見せられない處にして本菌の持つ一大特徴である。本菌は北海道に於けるアカダモにのみ發生し, 其他の樹種及地方に於ては未だ發見するに至らない。

2) *Poria sparassoides* Iwade, sp. nov.

子實體は背着生, 略々楕圓形の枕形に發育す, 大さ $10\times6\text{cm}$, 厚さ $1\sim1.5\text{cm}$. に達す。全體白色にして基物に近き部分のみ茶褐色を帯びる。若き子實體は初め白色の薄膜狀をなすが間もなく (2~3日にして) その表面に凹凸を生じ, 次第に發育して深き管孔を形成する。管孔は多角形乃至 2~3 個不規則に癒合して形狀, 大小著しく不同となる。徑は略々 $1\sim4\text{mm}$. あり, 管壁は薄膜狀で厚さ 0.2mm . 位あり, 口縁は稍々齒牙狀をなす。管壁の内面は平滑であるが, 縦に波狀の皺あり, 又横に 2, 3 の不明瞭なる輪紋をあらはす。子實體層は厚さ 60μ 餘, 擔子基は棍棒狀, 大さ $48\sim63\times5.5\sim7.0\mu$, 小梗は 4 本, 長さ 9μ あり, 胞子は無色, 平滑, 長楕圓形, $7.5\sim9.0\times3.5\mu$, 内に犬なる油滴を有する。囊狀體は圓柱狀にして $116\sim130\times4.0\sim6.5\mu$ あり, 子實體層より $37\sim60\mu$ 突出する。

Fructificatione effuso-resupinata, pulvinata, $10\times6\text{cm}$. lata, $1\sim1.5\text{cm}$. crassa, pallida dein ochrascente; hymenophoro tubuloso; poris angulosis vel irregularis, $1\sim4\text{mm}$. latis, dissepimentis membranaceis, ca 0.2mm . crassis, saepe deformatis, acie serrulata; hymenio ca 60μ crasso; basidiis clavatis, $48\sim63\times5.5\sim7.0\mu$, sterigmatis 4 praeditis, ca 9μ longis; sporis hyalinis, oblongis, laevibus, $7.5\sim9.0\times3.5\mu$; cystidiis cylindraceis, 116

~130×4.0~6.5 μ , ca 37~60 μ projectis.

和名, クダバナタケ (管花茸) 新稱,

産地, 樺太小田寒, 東京帝國大學樺太演習林内, 路傍草叢中に倒れるエゾマツの半腐朽木上に發生, “Typus—1941—VIII—27, 岩出採集 (東京帝國大學農學部及東京科學博物館に保管); 同演, 小田寒實驗林内に於けるエゾマツ風倒木上に發生, 1942—VIII—23, 岩出採集,

附記

本菌の成長したものは管孔の深さ 1.5cm. に達し且つ獨立した筒狀體が集合した觀があり一見 *Poria* 屬のものとは異なる如くなるも, 其の成長の初期に於て觀察する時は第3, 第4圖に示せる如く管孔の漸次形成されるを認め得るものにして, 管壁の異狀に發達する特徴を有する *Poria* 屬の1種であると認められる。

3) *Hydnum fimbriatum* Iwade, sp. nov.

子實體は無柄, 半圓形, 上下兩面に膨らみ断面は楔形をなす。大さ 10×6cm., 厚さ 5cm. あり。表面は粗糙にして凹凸甚しく, 恰もサ、クレ狀の小傘を重ね合せたる如き觀を呈する。

地色は類白色にして是に褐色乃至濃褐色の絨毛を密生する。内部の肉は軟骨質の骨格部と纖維質の充填部とが交互し, 全體類白色乃至淡褐色, 強靱にして弾力性あり。海綿の如く吸水性に富む。子實體托は針狀にして傘の下面及, 傘上面に於ける小傘の下面に發達す。最下面の針は大さ 10~15×0.3~0.5mm あり。圓柱狀にして先端尖り, 初め白色, 老熟後茶褐色となる。小傘の下面のものは短小である。胞子は無色 (胞子紋は白色) 類球形 (稀に少々橢圓形) 表面粗にして, 内に1個の大油滴あり, 徑 5.0~6.5 μ ,

Fructificatione lignicola, cuneato-dimidiata, 10×6cm. lata, 5cm. crassa, pallida dein ochraceo-fulva, superne densissime fibrilloso-lacerata, intus carnosio-spongiosa (hyphis fibrillosis et aculeis fibroso-degeneratis inter ramulos contexti cartilaginorum intermixtis); aculeis subulatis, 1~1.5cm. longis, 0.3~0.5mm. crassis, albis demum ochraceis; sporis hyalinis, subglobosis, subtiliter verrucosis, 5.0~6.5 μ .

和名, カイメンハリタケ (海綿刺茸) 新稱,

産地, 樺太相濱, 東京帝國大學樺太演習林内, トドマツの伐木の倒れたる切口上に發生 “Typus” 1941—VIII—24, 岩出採集 (東京帝國大學農學部及, 東京科學博物館に保管)

附記

本種は *Hydnum* 屬と *Steccherinum* 屬との中間形を示すものにして極めて興味深きもの

である。子實體内に於ける骨格状をなす傘の肉は即ちサンゴハリタケ (*Hydaum coralloides* (Scop.) Fr.) の子實體の分岐に相當し、枝と枝との間に鱗被狀の纖維及、不完全なる針とが充填し全體を海綿狀にならしむるものである。

4) *Cantharellus purpuraceus* Iwade, sp. nov.

子實體は分岐、多傘形をなし、マヒタケ状をなす。一塊の直徑10~16cm., 高さ13~18cm., 重量 500gr. に達する。傘は扇形乃至腎臟形、周邊は波形を呈し且つ淺裂する、表面は平滑ならず、多數の小鱗被を帯びる。鱗被は中央部に多く、周邊に向つて稍々放射狀に排列し次第に疎生する。中央部は濃紫色、周邊次第に淡色。肉は白色、柔かい肉質 (ウスタケ *Cantharellus flaccosus* に似る) 厚さ最厚部 1cm, 周邊は次第に薄い。莖の下半部は共通の太い基脚をなし、上方にて 1~2 回分岐する。傘の下面の子實體托は濃紫褐色を呈し、皺襞は不規則に分岐する (ウスタケに似る) 擔子基は棍棒狀で、大さ $31 \times 9.5\mu$, 4 個の胞子をつける胞子は橢圓形乃至長卵形にして一端尖り、無色、平滑、大さ $9.0 \sim 9.5 \times 4.6 \sim 6.0\mu$, 1 個の油滴を有す。

Fructificatione merismatoidea, 10~16cm. lata, 13~18cm. alta; pileolis flabelliformis vel reniformis, margine subundulata, superficie squamulosa, centro saturato violacea, prope marginem pallidiore, substantia carnosa, pallida; stipitibus connatis, concoloribus; lamellis crassis, venosis, ramoso-furcatis, decurrentibus, violaceis; basidiis clavatis, $31 \times 9.5\mu$ crassis, sterigmatis 4 praeditis; sporis ellipsoideis vel elongato-ovoides, hyalinis, laevibus, $9.0 \sim 9.5 \times 4.6 \sim 6.0\mu$.

和名, オホムラサキアンズタケ (大紫杏茸) 新稱, ミミタケ (瀬戸地方々言)

產地, 愛知縣瀬戸市外白坂, 東京帝國大學愛知演習林のアカマツ林内, 樹陰地々上に叢生, "Typus"—1940—X—20, 岩出採集 (東京帝國大學農學部及, 東京科學博物館に保管)

附記

本菌は愛知縣瀬戸市外に於てミミタケと稱し食用に供せらる。其の形狀シロアンズタケ *Cantharellus pallidus* yasuda に, 肉質ウスタケ *Cantharellus flaccosus* Schw. に, 又色彩ラツパタケ *Cantharellus clavatus* Fr. = *Neurophyllum clavatum* (Pers. ex Fr.) Pat. に類似するも下記の點に於て相異なる。

	オホムラサキアンズタケ	シロアンズタケ	ラツパタケ
傘	扇形，多傘形，表面に放射状の鱗被あり。全體紫色を呈す。	扇形，多傘形にして表面に鱗被なく平滑，全體白色を呈す。	概ね皿状をなし，表面に鱗被なく平滑なり。
皺襞	浅く不規則に分岐し，又状横脈殆どなし，子實層托濃紫褐色。	浅く又状に分岐す。胞子によつてクリーム色に着色する。子實層托初め白く微クリーム色を呈す。	密にして細く高く隆起し，横に連絡して網状をなす。 濃褐紫色。
胞子	楕圓形乃至長卵形にして，一端尖る。 大さ9.0~9.5×4.6~6.0μ	平滑，楕圓形，8×4μ（安田） 9~12×4.0~4.5μ（今關）	一端尖曲す長楕圓形にして，大さ11.0~12.5×4.5~5.5μ（岩出）

5) *Cantharellus violaceus* Iwade, sp. nov.

子實體は分岐，多傘形をなす。傘は一側に深き灣入部を有するか，概略圓形をなし，中央部は浅く漏斗状に凹む。傘縁は下方に卷曲し又多少波形を呈する。直徑1.2~2cm.，表面は粗糙にして鱗被を有し，中央部は灰青色，周邊は次第に紫色となる。莖は共通の太き基部より叢生し，時に1~2回上方にて分岐する。

傘の下面の子實層托は皺襞状をなし，濃厚なる紫藍色を呈する。皺襞は莖に深く垂生，傘に於ては殆ど横脈の連絡はないが，莖部では横皺に連絡し網目状をなす。

肉は淡褐色を帯びた白色で充實し，脆弱ではないが強靱でもない。子實層は厚さ110μ内外，擔子基は細長い棍棒形，徑6.5~9.0μあり。4ケの胞子を着生す。胞子は卵形又は楕圓形で一端に小嘴があり。大さ8.5~9.0×5.0~6.0μ，無色，平滑，側糸は未熟の擔子基に形狀類似し徑4~6μ。

Fructificatione merismatoidea; pileolis flabellato-subrotundatis, sub-infundibuliformis, 1.2~2.0cm. latis, superficie caeruleo-grisea, prope marginem violascentis; stipitibus solidis, connatis, substantia pallido-ochracea, carnosa; lamellis violaceis, crasse venosis, decurrentibus, infra pileolos generatim non anastomosantibus, deorsum fere reticulatis; basidiis clavatis, 4 sterigmatis; sporis ovoideis vel ellipsoideis, 8.5~9.0×5.0~6.0μ, hyalinis, laevibus.

和名， ムラサキウスタケ（紫白茸）新稱，

產地， 樺太相濱，東京帝國大學樺太演習林内，エゾマツ，トドマツの落枝，落葉の堆積せる地上に發生，“Typus” 1941—VIII—25，岩出採集（東京帝國大學農學部及，東京科學博物館に保管）

附記

本菌は *Cantharellus* 屬中色澤極めて濃厚なることを特徴とし、前記大紫杏茸 *Cantharellus purpuraceus* と比較するに色澤、形状、肉質共に相異なる。

6) *Tricholoma confragipes* Iwade, sp. nov.

傘は初め山高状をなし後殆ど扁平となる。徑 3~5cm. 傘縁は内方に卷く、表面は類白色にして、薄き淡褐色の細かい鱗被を帯びる。褶は白色、密生し、莖に殆ど着生するが如く少しく灣生する。莖は長さ 3~7×0.3~1.2cm. 基部は膨大し徑 1.2~2.0cm. あり、表面は白色の地肌に茶褐色のキラ、状の鱗被を被むる、内部は充實し、傘の肉と同質、白色で纖維質を帯び脆からず、擔子基は棍棒狀、25~31×7~8 μ 、4ケの胞子を着生、胞子は白色略々楕圓形一端に小嘴あり、長さ 7~9×4~6 μ 、内に 1~3 個の油滴を有する。

Solitarium vel subcaespitosum; pileo convexo dein plano, sicco, pallido, roseo-squamuloso, margine incurva, carne alba; lamellis albis, confertis, adnato-sinuatis; stipite 3~7cm. longo, 0.3~1.2cm. crasso, sursum leviter attenuato, deorsum bulboso-incrassato, 1.2~2.0cm. crasso, albo, fulvo-micaceo-squamuloso, solido; basidiis clavatis, 25~31×7~8 μ crassis, 4 sterigmatis; sporis hyalinis, ellipsoideis, laevibus, 7~9×4~6 μ .

和名、 サ、クレスメデ 新稱、

產地、 樺太大泊町附近、トドマツ枝葉より水蒸氣蒸溜により精油を採取せる蒸溜殘滓の堆積上に發生、“Typus” —1941—IX—1, 岩出採集（東京帝國大學農學部及、東京科學博物館に保管）

附記

本菌は樺太に於て食用に供し、美味にして虚弱者に用ひて藥效作用ありと云はる。乾燥による色澤の變化少し。

7) *Armillaria edodes* Berk. f. *sterilis* Iwade, f. nov.

=*Cortinellus edodes* (Berk.) Saw. f. *sterilus* Iwade, f. nov.

基本種に比し褶が退化し、子實層が形成されない。概して傘の縁は莖の上部に癒着したまま發育し、莖の上部は倒圓錐形に膨れ、内部は多孔質になつて居る。

E typo differto lamellis degeneratis, sterilis.

和名、 フジシヒタケ（富士椎茸）新稱、

產地、 山梨縣中巨摩郡源村字築山（1937. 飯田雅秀採集）同西山梨郡千代田村（1940—XII—3, 末木採集）同南都留郡福地村（1941—V—15, 河村採集）京都府下芦生京都帝國大

學演習林 (1940—X—8, 岩出採集) 何れも椎茸培養櫓木上に發生 (“Typus” —1941—V—15, 河村採集, 東京帝國大學農學部及, 東京科學博物館に保管)

附記

(1) 椎茸は我邦に於ける食用菌茸中最も古き歴史を有し産業上重要な菌茸である。現在樺太より臺灣に亘つて分布し過去 200 年來人工培養が行はれその櫓木として次の樹種が使用されて居る。

クヌギ *Quercus acutissima* Carr. コナラ *Quercus glandulifera* Bl. ミヅナラ *Quercus grossoserrata* Bl. クリ *Castanea sativa* Mill. イヌシデ (ソロ) *Carpinus yedoensis* Max. ノブノキ *Platycarya strobilacea* S. et Z. ホノノキ *Magnolia hypoleuca* S. et Z. var. *concolor* Miq. コバンモチ (臺灣) *Elaeocarpus Kobanmochi* Koidz.

又天然には此の他

ヤマモ、*Myrica rubra* S. et Z. ハンノキ *Alnus japonica* S. et Z. ブナ *Fagus Sieboldi* Endl. イスノキ *Distylium racemosum* S. et Z. 等に發生を見る。然して

最近シヒタケの性についての科學的研究が進められシヒタケが *Heterothallism* (Tetrapolar) なることが明かとなり之れを 4 種の性群 (Sexual groups) に類別し各單相菌糸の人工交配を行ひシヒタケの品種改良が企圖されると共に純粹培養菌糸が椎茸の櫓木培養上、種菌として使用されるに至つた。然し我國に於ける從來の人工培養法は、子實體より胞子を採取し其の水溶液を原木に接種し來つたもので之れにより各單相菌糸の自然交配が行はれる結果子實體の發生を見るに至るものであるが、斯く永年に亘る屋外人工培養は、環境的變化と相俟つて現在に於ては子實體の形狀甚だしく多變形となり菌傘、菌柄の形狀、色澤、發生期等に於て變異を來たして居ることは明かである。之れは恰も歐米に於ける培養種たるハラタケ *Agaricus campestris* の長年に亘る人工培養の結果、多くの園藝的品種を形成するに至つたこと、其の軌を同じうするものと考へられる。然し之等變化の多くは植物分類學上より見て一つの *variety* 又は *forma* と見做す程度のものでなく單なる園藝的品種に過ぎないのである。筆者は曩に河村柳太郎、末木眞平氏等の好意により子實體の形狀並に生殖器官の特異なものを手にするを得、植物學的並に化學的成分につき研究を重ね、本菌がシヒタケの一品種 (*form.*) と見做し得べきことを確定し之れに新品種名として *f. sterilis* なる學名を付さんとするものである。

本菌の原種は昭和 12 年山梨縣中巨摩郡源村字築山飯田雅秀氏方に於てコナラを原木として、該地產のシヒタケ胞子を接種し常法により寢込せるものゝ中より基本種の子實體に混じ

て發生せるものにして、基本種よりの偶然變異と見做される。當時本菌は不完全なる褶の一部を有したるものにして入手者末木眞平氏は同縣林業試驗場河村柳太郎氏に贈り、河村氏の手により組織培養が行はれ前後數回の寒天培養、櫛木培養を経て全く子實層を退化せる形態を固定するに至つたものであるが、其の退化の經路を調査するに第 10 圖の如く漸進的に退化せることが窺はれ、此の段階にある子實體は形狀正形でなく、傘の色澤、構造基本種に類似し只、其の周邊が下捲し一線を劃して莖に連結し、或物は不完全なる褶の一部を有し舊態への還元性がある。傘徑 10cm. 以下、傘の厚さ 3cm. 以下を普通とし莖は傘の表面と同色鱗被を有し小型のものは莖の太さ上、下甚だしき差なけれども肥大せるものは、上部膨大し錐狀を呈し長さ 7cm., 徑上部 5cm. 下部 2cm. 程あり。傘と莖の重量比は約 2:1 にして全體の比重小型のもの 0.43, 大型のもの 0.35 である。

又不完全に形成された子實層より摘出した擔子及、孢子は第 10 圖 (4) の如く擔子は虛弱なるもの多く孢子は略々卵形にして $11 \times 6\mu$ にして基本種の $6 \sim 8 \times 3 \sim 4\mu$ と比較して多少大きい様である。

又本種の化學的成分としては香氣其他に於て基本種と大差は見られないが Ergosterin の含有量比較的少量にして或るものは微量に過ぎないことは其の特徴であるとも云ひ得る。

本種に就ては更に科學的研究により本種發生の過程を究明せんとするものであるが、此處に筆者の今日迄に得たる大略を發表し本菌の固定と培養に多大の努力を拂はれたる河村柳太郎氏の勞を多とせんとするものである。

(2) シヒタケの學名に就いては從來多數の植物學者により次のものが用ひられて居る。

Agaricus (Armillaria) edodes Berk., M. J. Journ. of Linn. Soc. Bot. Vol. XVI, P. 50, 1878.

Collybia Shiitake Schroet., J. Gartenflora, XXXV, P. 105, 1886.

Armillaria edodes Berk., Saccardo, P. A. Syll. Fung. V, P. 79, 1887.

Lepiota Shiitake Tanaka, (田中延次郎) Bot. Mag. Tokyo, 11, P. 157, 1889.

Tricholoma Shiitake Ramb., Handl. Larger Brit. Fung. 73, 1923.

Shiitaker cortinellus Lloyd, Myc. Notes, No. 71, 1266, 1924.

Armillaria Shiitake Rolfe, R. T. & Rolfe, F. W. The Romance of Fung. world. P. 211, 1925.

Cortinellus Shiitake (Schroet) P. Henn., Shirai, M. (白井光太郎) 新選日本植物圖説

Cortinellus Shiitake P. Henn., Kawamura, S. (川村清一) 日本菌類圖説, 同食菌と

毒菌—Makino, T. (牧野富太郎) 日本植物圖鑑—Hiroe, I. (廣江勇) 應用菌學研究
Cortinellus Berkeleyanus S. Ito et Imai, Bot. Mag. Tokyo, Vol. 39, No. 468, 1925.
Cortinellus edodes (Berk.) Sawada, Natur. Hist. Soc. Formosa, Vol. XXVI,
 No. 153, June, 1936.

Cortinellus edodes (Berk.) S. Ito et Imai, Journ. of Agri. Hokkaido Imp. Univ.
 Vol. XLIII, Mar. 1938.

之れを見るにシヒタケの屬名として *Armillaria*, *Collybia*, *Lepiota*, *Tricholoma*, *Shiitake*, *Cortinellus* 等が適用されシヒタケの形態による分類が如何に複雑なるかが窺はれる。又種名に就ても *edodes*, *Shiitake*, *cortinellus*, *Berkeleyanus* 等が用ひられてゐることは本菌が我國に於て菌蕈類中最も重要な地位にあり、且つ最も多くの人々に使用される學名だけに誠に繁雜に堪へない。要するに M. T. Berkeley (1878) が本菌に初めて *Agaricus* (*Armillaria*) *edodes* Berk. なる學名を與へてから40數年後北大伊藤誠哉教授(並に川村清一博士)は此の學名の標本が英國 Kew 博物館に保存されて居るものを鑑定の結果、シヒタケに相違せざることを立證されて居るのであるから *edodes* なる種名は當然シヒタケの種名として採擇さるべきで、問題はシヒタケを *Armillaria* 屬に包含すべきや又は *Cortinellus* なる1屬の下に取扱はれるべきやにあるが之れに關する分類學の見解は暫く措き (*Cortinellus* 屬を採用して居ない學者もある) シヒタケと *Armillaria* 屬なるマツタケ (*A. matsu-take* S. Ito et Imai) との場合に於いて見るに兩者の間に形態的條件のみによつては屬の分類上困難なる場合がある。筆者は從來最も多く用ひられたシヒタケの屬名 *Cortinellus* を一概に變更せんとする者ではないがしばらく *Armillaria* なる舊屬名を此處に使用することとし、今後の検討に俟つこととした。

8) *Sarcoxylon aureum* Iwade, sp. nov.

本菌は球形乃至凹凸ある塊状をなし林内潤葉樹の倒木上に生ずる、徑 3~15cm. 表面に黄色の疣點を密生し成長するに伴ひ頂點の疣點は疎となる。子囊殼は上部表面下に發達し黒褐色を呈するも子座の肉は淡黄白色にして恰も馬鈴薯の肉に類し老熟するも變色することなく乾燥すれば白色の乾酪質となる。子囊殼は長さ 2×0.8mm., 長楕圓形にして1層をなして發達し子座の下面には發達せず、子囊殼の内部には側糸と共に子囊を密生す。子囊は8個の胞子を藏し長さ 80~125×9μ., 胞子は黒色兩端稍々尖れる楕圓形にして1個乃至多數の油滴を含み長さ 10~15×6~8μ, 成熟するに及び子座の表面に開口して放出すると共にペンキ狀の黒色粘液を分泌し子座の表面を黒色に汚染す。

Stromate grandi, globoso vel subgloboso, 3~15cm. lato, extus verrucoso-colliculoso, primo flavo-auratiaco, deinde nigrescenti, massa atra sporarum subviscosis, intus pallido, leviter flavescenti, caseoso-carnoso, sicco fere caseoso; peritheciis monostichis, in parte dorsali stromatis formati, immersis, oblongis, $2 \times 0.8\text{mm}$; ascis cylindraceis, breve pedicellatis, $80 \sim 125 \times 9\mu$, octosporis, paraphysibus immixtis; sporidiis atro-fulgineis, ellipsoideis, utrinque acutiusculis, monostichis, $10 \sim 15 \times 6 \sim 8\mu$.

和名, オホキコブタケ (大黃瘤茸) 新稱,

產地, 臺灣臺中州竹山郡鹿谷庄, 鷄頭, 東京帝國大學臺灣演習林, 林内伐採跡地に於ける潤葉樹倒木上に發生 “*Typus*” 1940—X—20. 岩出採集 (東京帝國大學農學部及東京科學博物館に保管)

附記

Sarcoxylon, Cooke (*Grevillea* 12:50. 1883) の特徴は子座は殆ど肉質にして半球形, 枕形等を呈し, 子囊殻は其表皮下1列に並び表皮又は殻皮を缺くことにして *Entonaema* 屬とは其肉質に於いて, 又 *Engleromyces* 屬とは子囊殻の單層なることにより分類されて居る1屬である。本屬に屬するものとして, *S. lycogaloides* B. et Br.; *S. compunctum* Jungh. の2種が発見されて居るが前者は直徑 8mm. の小菌にして胞子に疣を有することにより, 又後者は背生の子實體を生ずることにより本菌と容易に區別されるものである。又 *S. aurantiacum* [*Mycological notes* (C.G.Lloyd) 1920.] は肉, 膠質にして T. Petch (1923) により *Entonaema* 屬に移されて居る。

本菌は臺灣臺中州内の海拔高 100m. 餘の林内に産する熱帯種にして本邦に於て本屬の發見は本菌が最初である。

9) *Peridioxylon petersii* (Berk. et Curt.) Shear

Myc. XV. 126, 1923.

Syn. *Hypoxyton petersii* B. et C., *Cuban Fungi* n. 822—*Saccards, Syll. Fung.* I. 369, 1882.

Bolinia petersii (B. et C.) Lloyd, *Myc. Writ.* VII. 1283, 1924.

子實體は最初淡褐色, 厚さ 1~2mm. の表皮を被り成長するに及び上面の表皮は破れ肉質の子座を展開し扁平な獨樂狀を呈し, 表皮の一部は其の扁平部の周邊に残留する。直徑 2~3.5cm. 厚さ 0.5~1cm. 表面藍黑色を呈し全面に互り無數の子囊殻の開口部が微小の突起をなして散在し胞子の放出と共に藍黑色の液狀粘質物を分泌し乾燥すれば固化する。子實體の裏

面は成熟後も皮膜を被むり淡褐色にして多少凹凸あるも平滑である。子座の内部は茶褐色ゴム質を帯びた弾力性ある肉質にして子囊殻は茄子形にして壁は多少濃色を呈し第 13 圖の如く子座の上半部に不規則なる數層をなして埋没し深所のもの程長き頸を有し子座の表面に稍々隆起して開口する。球狀部の大さ $0.7 \sim 1.0 \times 0.4 \sim 0.46 \text{mm}$. 口徑 0.07mm . あり、子囊殻、球形部の内面には子囊層を形成し多數の子囊と共に側糸を混する。子囊は圓柱狀にして、大さ $57 \sim 62 \times 4.5 \mu$, 内に 8 個の胞子を藏す。成熟せる胞子は藍黑色、一端尖れる橢圓形にして大さ $7 \sim 8 \times 3.5 \sim 4.0 \mu$, 内に 1~2 個の油滴を藏す。

和名、ヘタタケ（蒂茸）新稱、

産地、朝鮮全羅南道求禮郡土旨面内東里、東京帝國大學全羅南道演習林、林内の腐朽せるナラの伐根の側面に群生、(1936—IX—4, 岩出採取)

分布 日本（朝鮮）北米、

附記

本菌は最初北米 Alabama 州に於て Judge Peters により發見され 1869 年 Berkeley と Curtis によつて *Hypoxylyon petersii* B. et C. なる學名を付して發表されたが 1923 年 C. L. Shear は *Peridioxylon* なる新屬に編入したものである。本屬の著しい特徴は、子座は肉質にして子囊殻炭化せず子座の上半部の組織内に不規則な數層をなして埋没され、子實體は幼時皮膜により包まれ成長するに及び其の上半部の皮膜は斷片的に破れ、其の一部分は子座の周圍に残留することで *Pyrenomycetes* 中の *Sarcoxylyon*, *Penzigia*, *Thuemanella*, *Engleromyces*, *Entonaema*, *Xylocrea* 等の諸屬とは多少類する所あるも、上記の點に於て相異なるものである。

本菌は北米に於て Alabama, Ohio, Kentucky, Virginia の州内及、Cuba のみに産する 1 屬 1 種の稀菌で本邦に於ける發見は特筆に値するものである。本菌子座上面は外觀クロボタンに類似するも皮膜と裏面の状態は柿の蒂に類似する所より本和名を與へた。

10) *Boletinus cavipes* (Opat.) Kalchbr.

Myc. XXIV. 339, 1932—Myc. XXXI, 669—701, 1939—Krieger C. C. The Mushroom handbook P. 252, 1936.

傘は初め稍々圓錐狀中高であるが後開いて半球狀より略々扁平となる。徑 $3 \sim 9 \text{cm}$. 表面は黄褐色、赤褐色等混交し、且つ細毛狀の鱗被を密布、軟き觸感を有し、軟質、肉は膨軟にして黄白色である。管孔面は黄色なるも最初類白色の蓋膜に覆はれる。蓋膜は後裂けて 1 部は傘縁に、残りは莖上に残る。管孔は莖に稍々垂生、莖を中心として略々放射狀に排列する。

即ち管壁の放射壁は高く明瞭、横壁はやゝ低く、間隔不規則である。従つて管口の形状、大小も不同である。莖は長さ 5~7cm. 中央部稍々膨大し最大部徑 2~2.5cm. 表面黄褐色の多色型にして鱗被を有し表面粗糙である。且つ莖の上部には蓋膜の殘部よりなる鏢を有し、其の上部は平滑にして白色である。莖の内部は空洞となり肉質傘と同質にして類白色である。胞子は白色にして形状不同の長橢圓形にして大さ $8\sim 10 \times 3.8\sim 4.1\mu$, 1~2 個の油滴を藏する。

和名、 ウツロヒダアミタケ (空洞褶網茸) 新稱 (食用)

産地、 朝鮮金剛山九龍園附近に於ける針闊混淆林地及、岩窟附近の日蔭地上に群生す。

(1938—IX—7. 岩出採集)

分布 日本 (朝鮮) 北米,

附記

Boletinus 屬は管孔の配列、褶狀を呈することゝ、傘より分離困難なることにより Kalchbr. により、*Boletus* 屬と區別されて居る 1 屬で、本菌の他、*B. pictus*, *B. spectabilis* 等の 2~3 の種類が発見されて居る。本邦に於ては未だ本屬のものは発見されるに至らなかつたもので、本菌が最初である。

圖 版 説 明

第 1 圖 *Auricularia hispida* Iwade—オホアラゲキクラゲの子實體 (×1)

(1) は子實體のアカダモ材上に發生せる狀況。(2) は傘の裏面にして凹窩の狀態を示す。(3) は傘表面に密生する束毛の擴大圖。(4) は子實體の縱斷面。

第 2 圖 *Auricularia hispida* Iwade—オホアラゲキクラゲの各部の組織圖。

(1) は傘の上表面を覆ふ束毛を示す、此の束毛は中空にして且つ側壁に疣點を有する細毛 (2) の集合體である。(3) は子實體の一部 (約×600)。(4) は棍棒體。(5) は擔子基。(6) は胞子 (何れも擴大)

第 3 圖 *Poria sparassoides* Iwade—クダバナタケの子實體。

(1) は子實體のエゾマツ朽木上に發生せるもの (×1)。(2) は子實體の幼菌の擴大圖にして周邊は膜狀をなして基物上に擴がり凹窩を生ずる (×2)。(3) は子實體 1 部の擴大圖にして深き筒狀の管孔を示す (×3)。

第 4 圖 *Poria sparassoides* Iwade—クダバナタケの幼菌及組織圖。

(1) は基物上の幼菌にして淺き管孔を膜質上に形成せんとする時代 (×2)。(2) は稍

々成長せるもの(×1)。(3)は子實體1部の拡大圖(×500)並に胞子(×2000)。

第5圖 *Hydnum fimbriatum* Iwade—カイメンハリタケの子實體。

(1) はエゾマツの切口に發生せる子實體にして傘上には多數重複せるサ、クレ状の小傘あり(×1)。(2)は同縦斷面圖にして内部の骨格部の構造を示す(×1)。(3)は胞子(×1000)。

第6圖 *Cantharellus purpuraceus* Iwade—オホムラサキアンズタケの子實體(×1) 及胞子(×620)

第7圖 *Cantharellus violaceus* Iwade—ムラサキウスタケの子實體(×1), 及組織圖を示す。

(1) は擔子基(×500)。(2) は側糸(×500)。(3) は胞子(×100)。

第8圖 *Tricholoma confragipes* Iwade—サ、クレシメデの子實體にしてトドマツ枝葉上に發生せるものを示す(×1)。下はその組織圖にして擔子基(×1000)及び胞子(×1200)を示す。

第9圖 *Armillaria edodes* Berk. f. *sterilis* Iwade—フジシヒタケの子實體(×1)

第10圖 *Armillaria edodes* Berk. f. *sterilis* Iwade—フジシヒタケの變異階梯圖。

(1) はシヒタケ基本種。(2) はフジシヒタケの縦斷面圖。(3) は褶の1部分漸次退化し、全く消失するまでの階梯を圖示す。(4) はフジシヒタケ變異の階梯にある子實體より摘出せる擔子基及胞子擴大圖。

第11圖 *Sarcoxylon aureum* Iwade—オホキコブタケの子實體(×3/3)

第12圖 *Sarcoxylon aureum* Iwade—オホキコブタケの組織圖。

(1) は幼菌の子座の頂點附近に於ける子囊殼を示す(×6)。(2)は成熟せる子座の表面下に排列せる子囊殼(×6)。(3)は同、子座の横斷面にして上部より見たる子囊殼の排列狀況を示す(×6)。(4)は子囊殼の縦斷面にしてその壁には黑色の沈澱物が點在し外觀黑色に見ゆ成熟に従ひ漸次炭質に變化する階梯にあり。(5) は子囊層の1部(×480)。(6) は胞子(×1400)。(7)は子實體中の菌糸(×600)。

第13圖 *Peridioxylon petersii* (Berk. et Curt.) Shear—ヘタタケ子實體(×1.5) 及組織圖。

(1) は表皮が破れ子座の露出せるものを示す。(2) は同裏面。(3) は同縦斷面にして子囊殼の數層不規則に排列せる状態を示す。(5) は子座の1部の縦斷面にして子囊殼の排列並に子座の表面に開口せる狀況を示す(×12)。(6) は1個の子囊殼の形狀を示す(×45)。(7) は子囊及側糸(×650)。(8) は胞子(×1100)。

第14圖 *Boletinus cavipes* (Opat.) Kalchbr.—ウツロヒダアミタケの子實體(×1)。

第15圖 (1) は *Auricularia hispida* Iwade—オホアラゲキクラゲ (基準標本より)

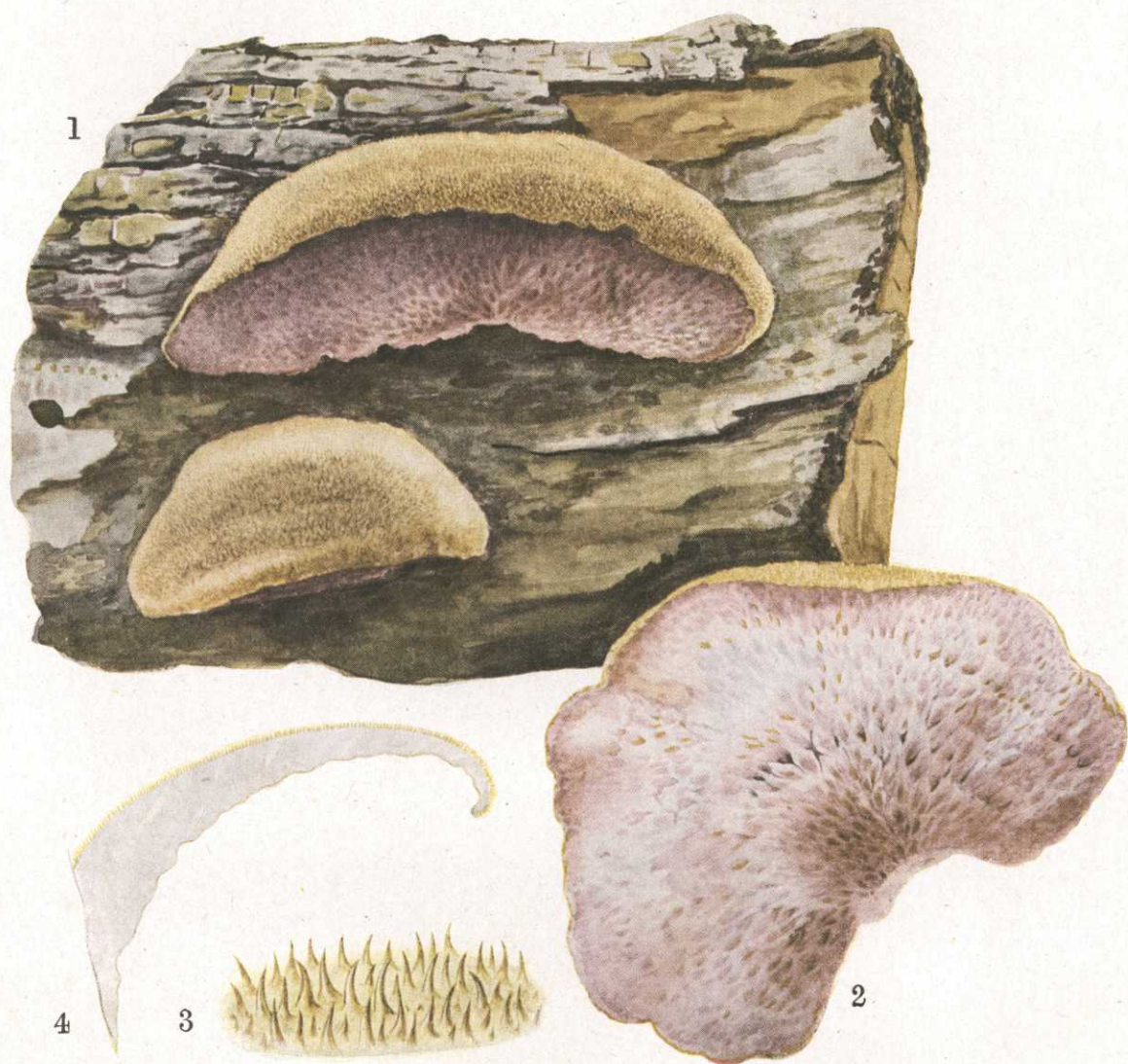
(2) は *Poria sparassoides* Iwade—クダバナタケ幼菌の天然發生狀況

(3) は *Poria sparassoides* Iwade—クダバナタケ (基準標本より)

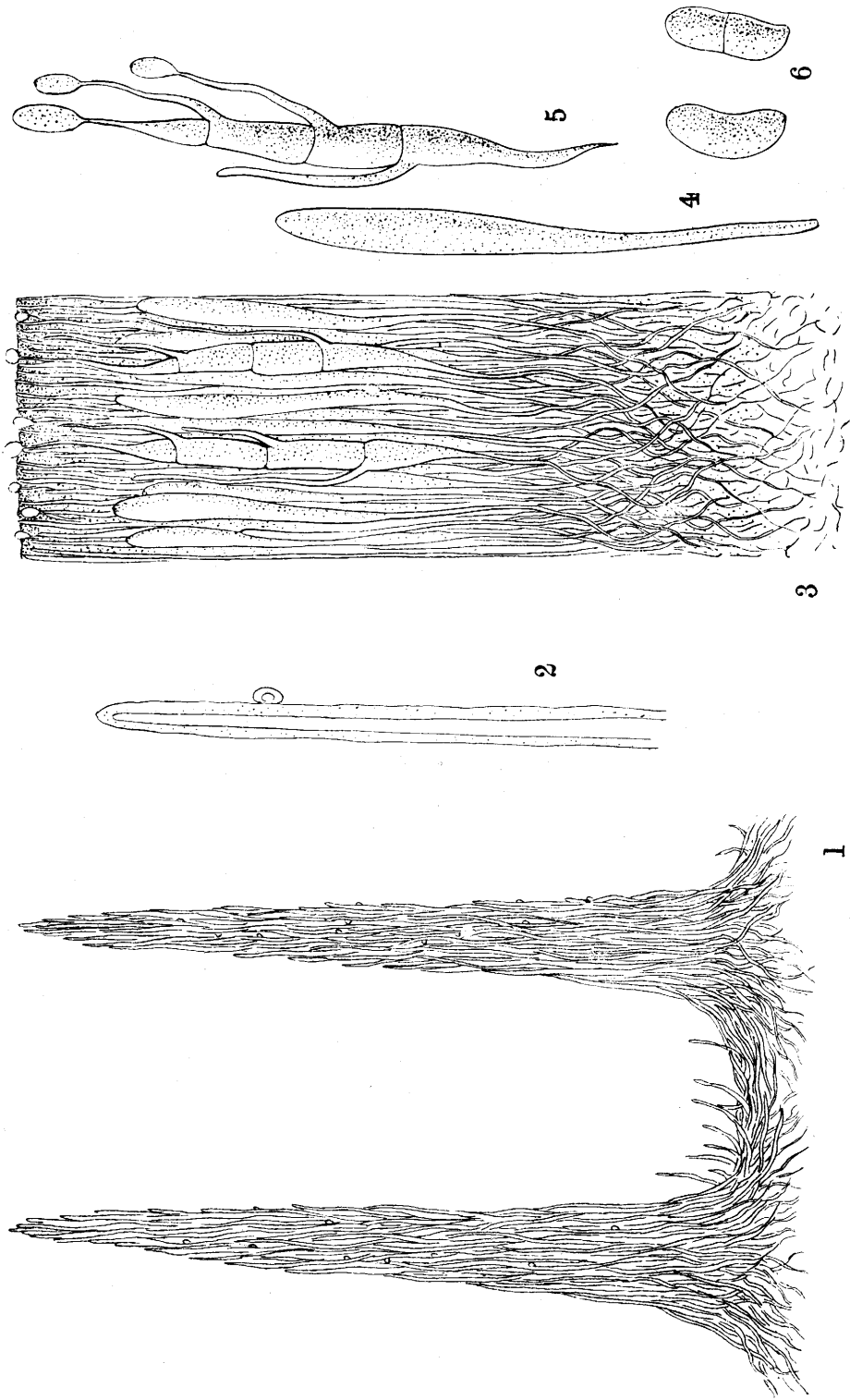
第16圖 (1) は *Hydnum fimbriatum* Iwade—カイメンハリタケ (基準標本より)

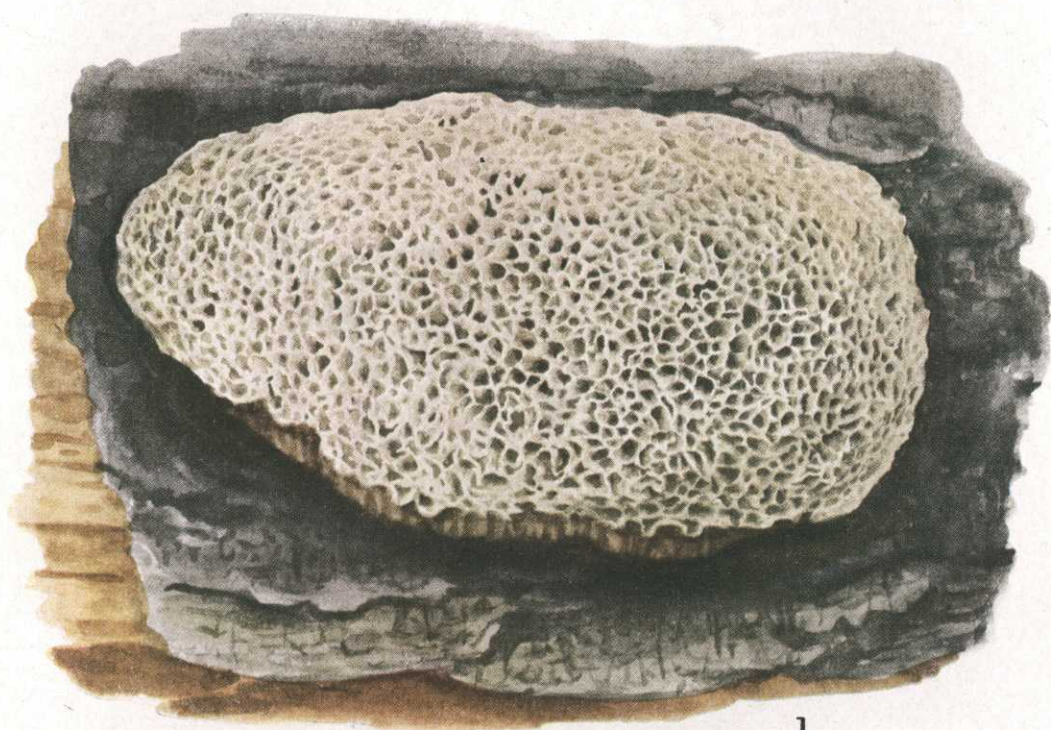
(2) は *Armillaria edodes* Berk. f. *sterilis* Iwade—フジヒタケ小型種の櫓木上に發生せる狀況。

(3) は *Boletinus cavipes* (Opat.) Kalchbr.—ウツロヒダアミタケ天然發生狀況。

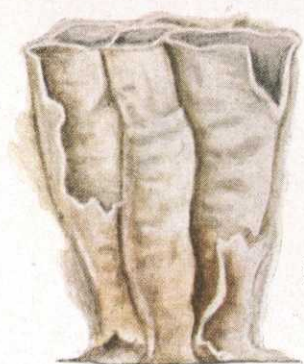


第 2 圖

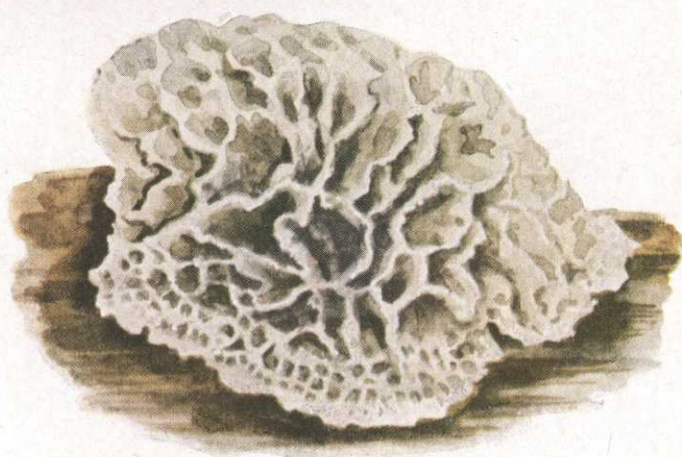




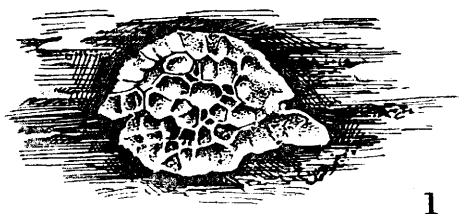
1



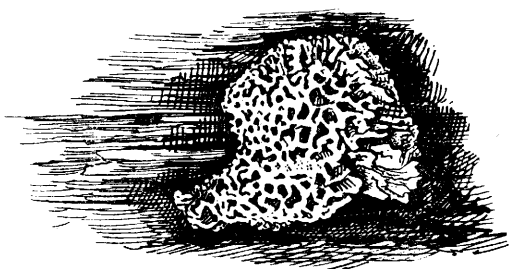
3



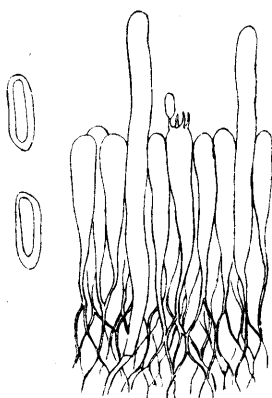
2



1

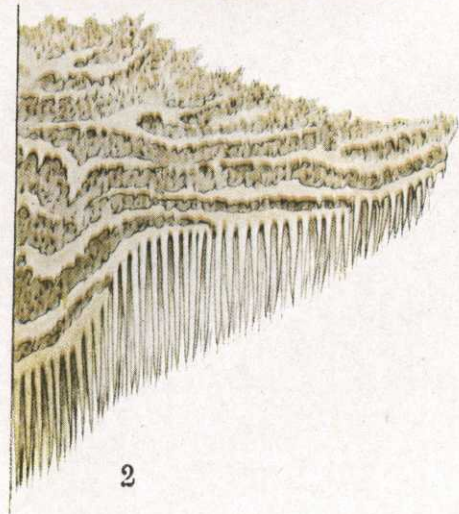
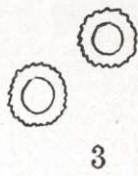
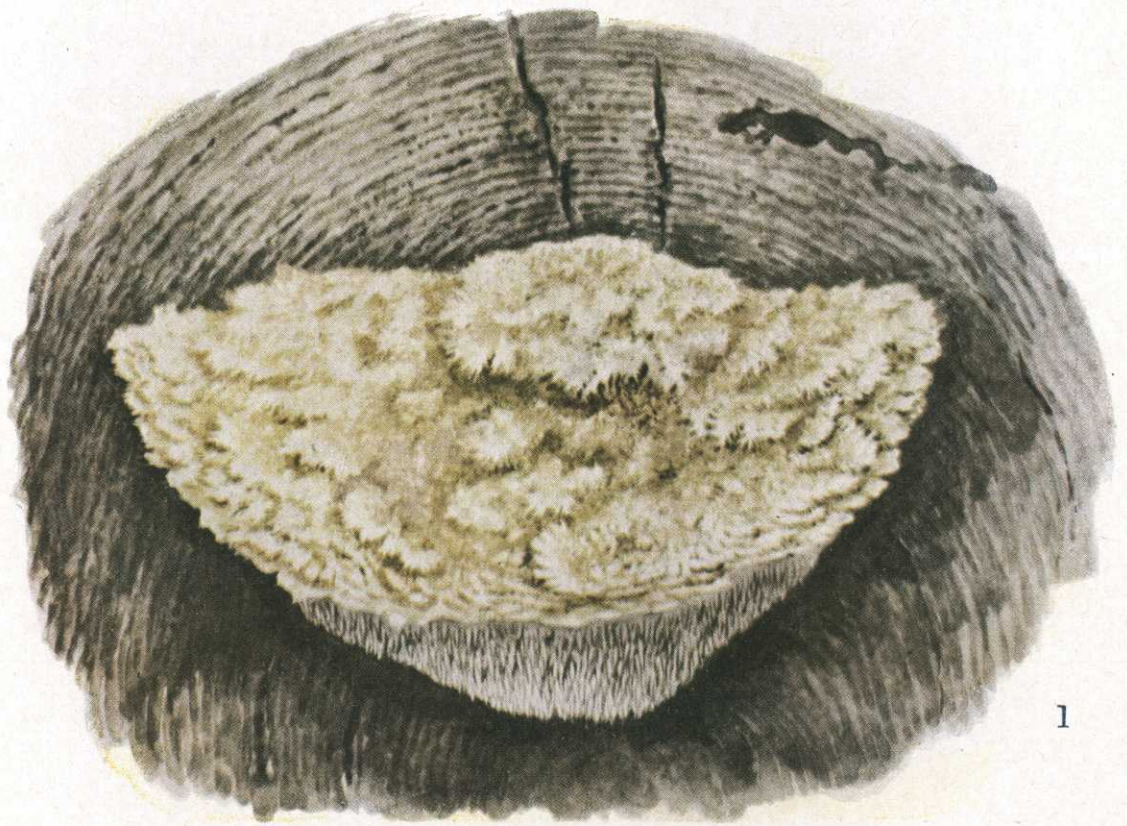


2

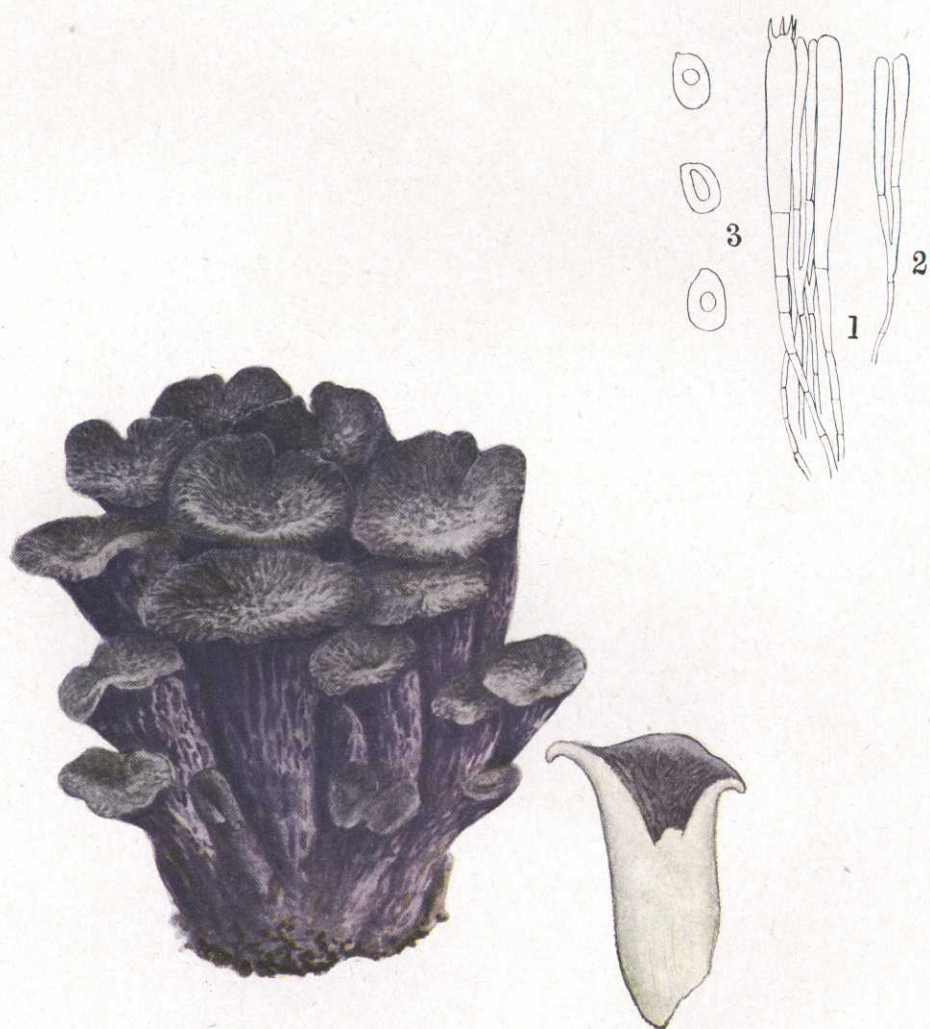


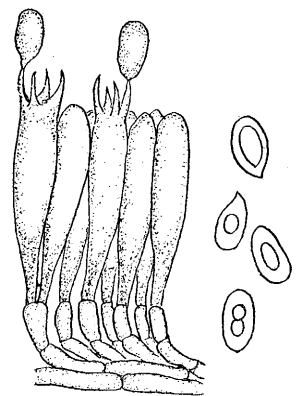
3

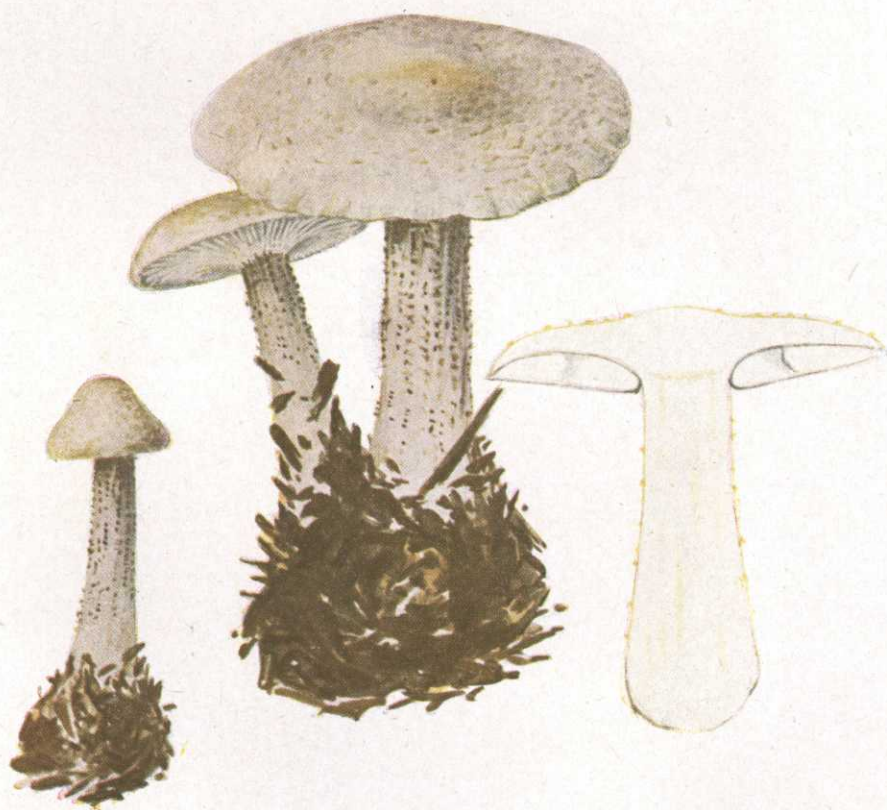
第 5 圖





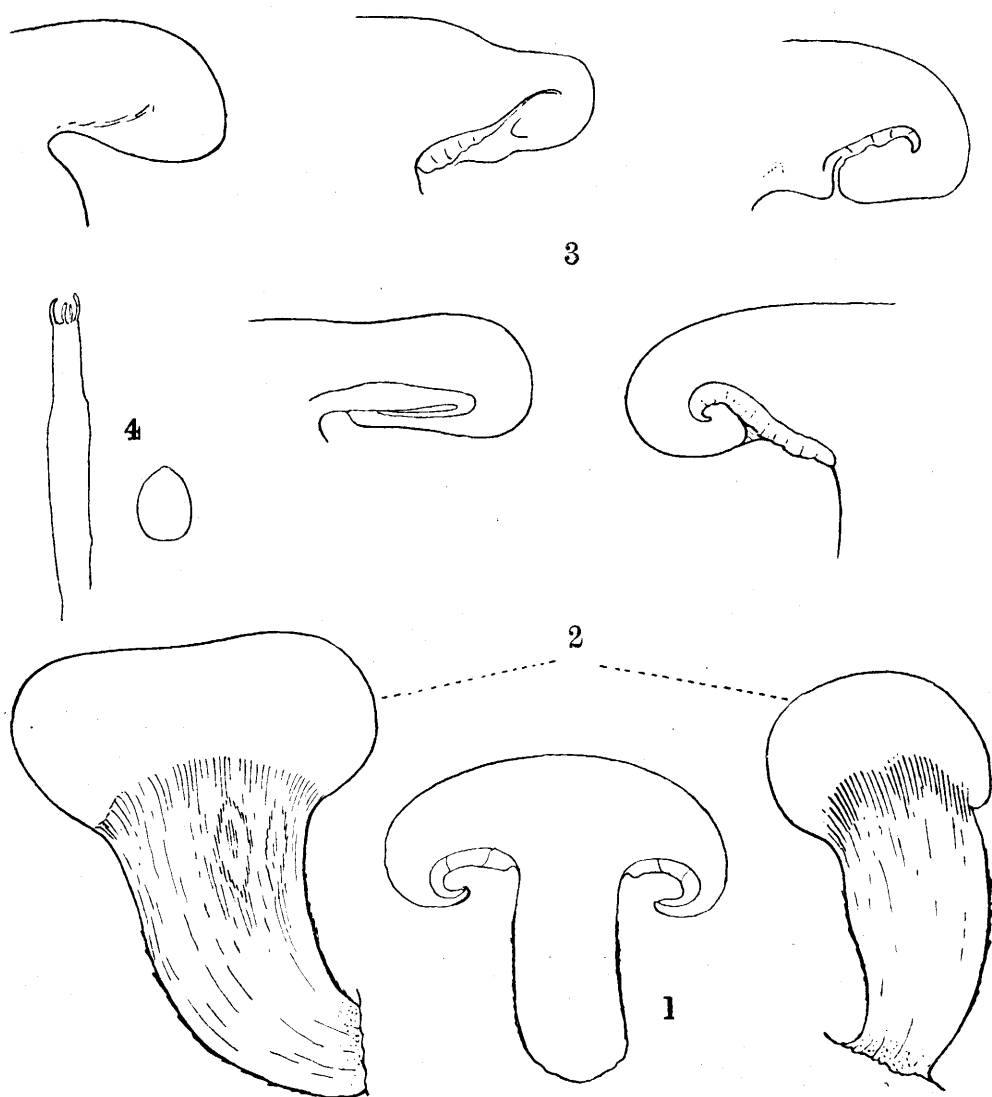




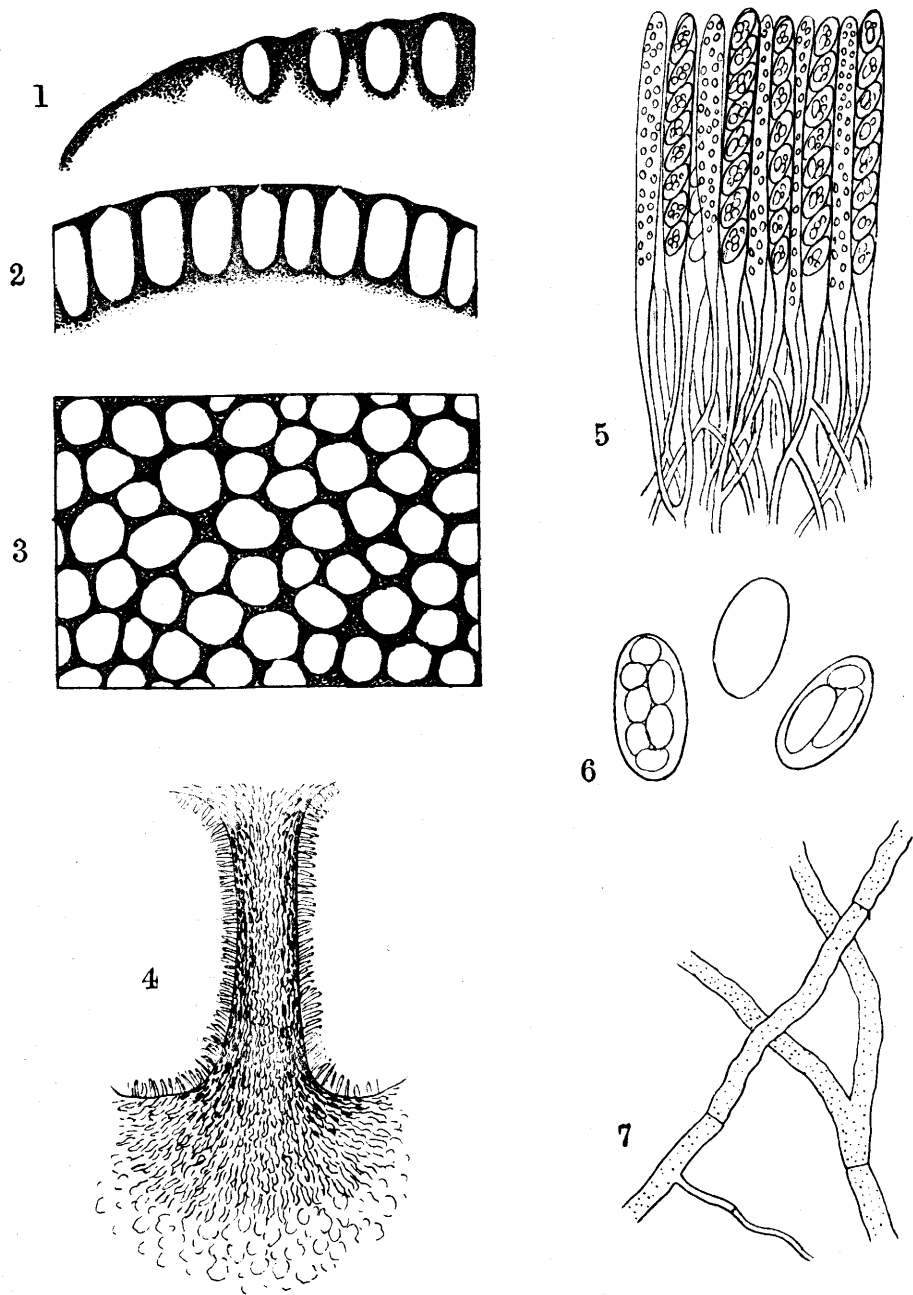


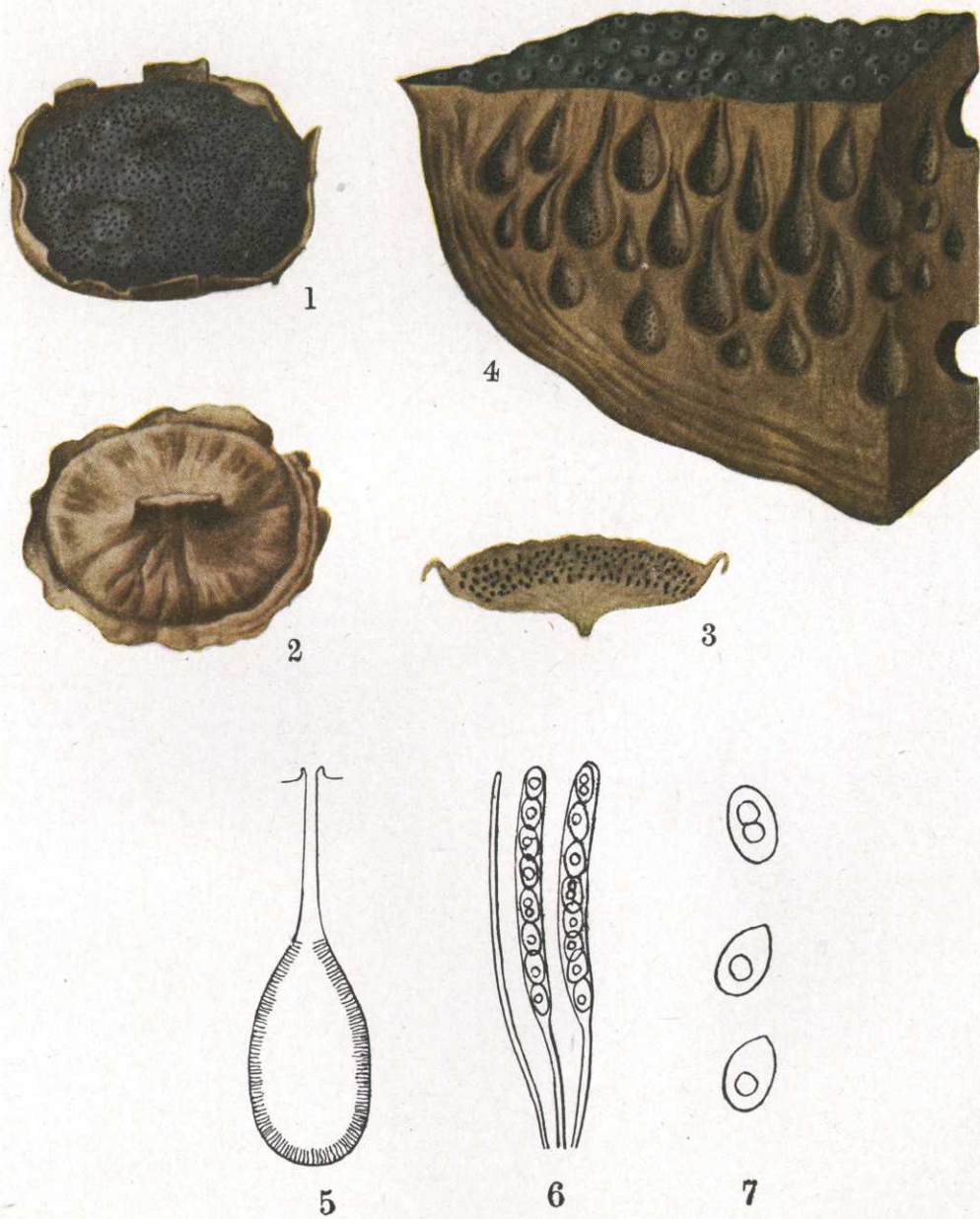


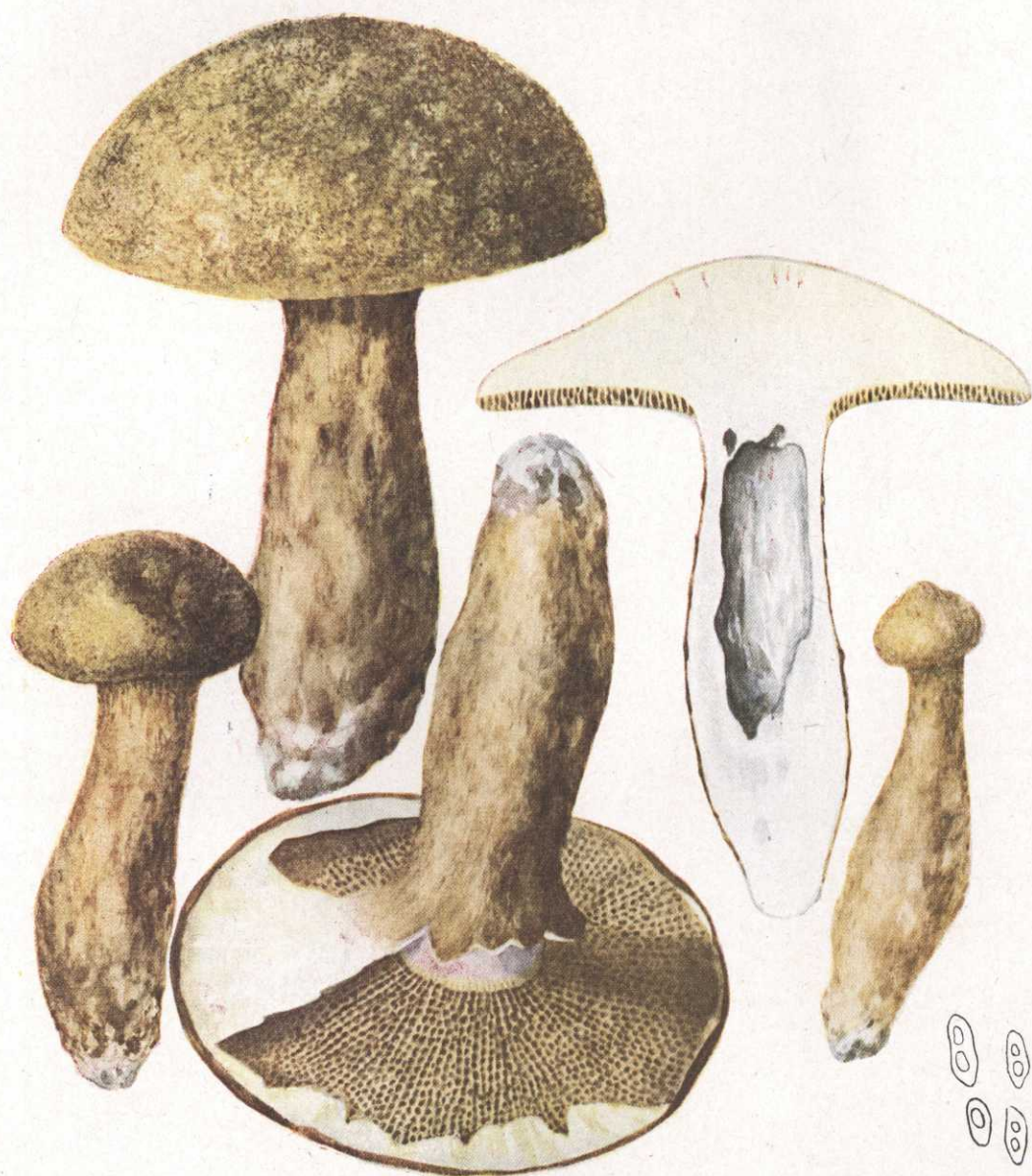
第10圖

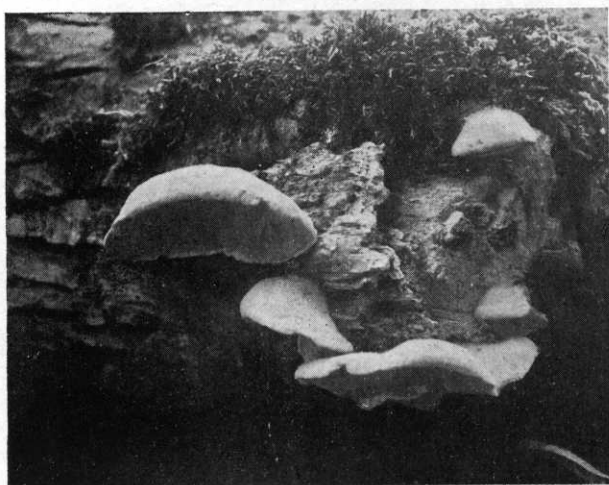




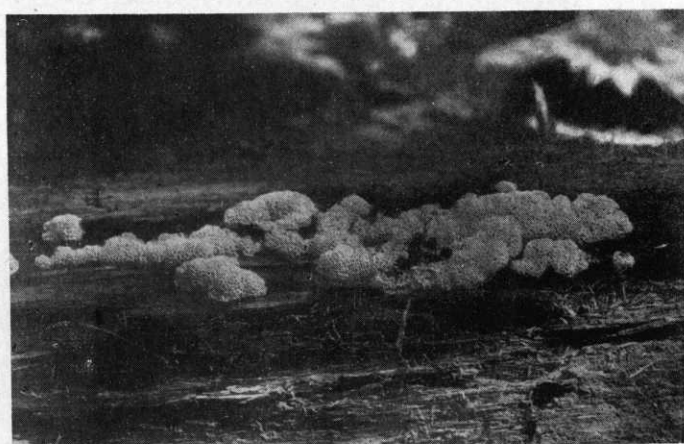




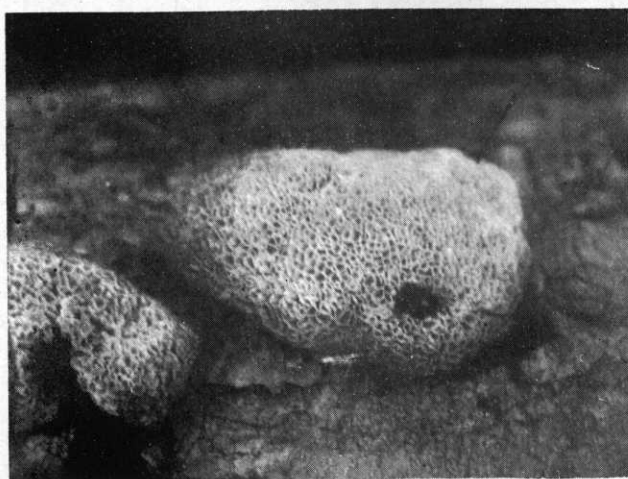




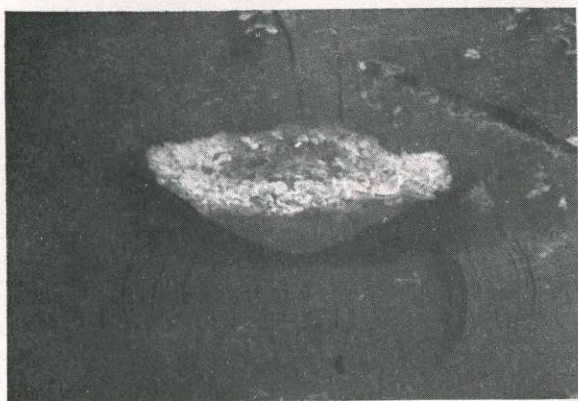
1



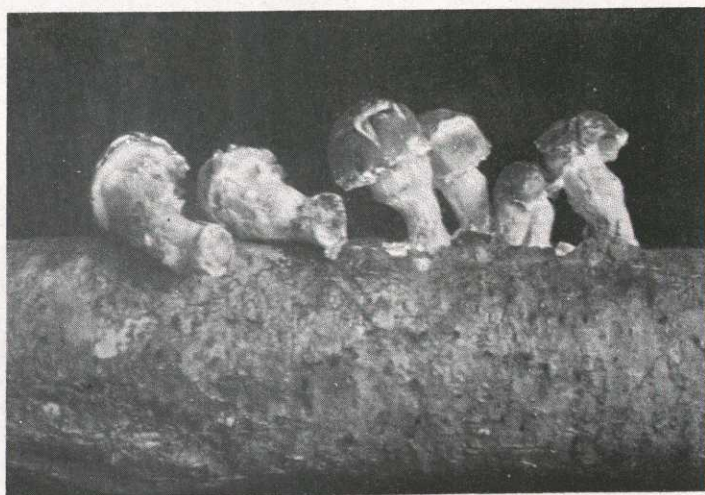
2



3



1



2



3